

○ コシガヤホシクサと歐洲、北米産の *Eriocaulon septangulare* との關連について (前川文夫) Fumio MAEKAWA: *Eriocaulon heleocharioides* may belong to the same section with American *E. septangulare*.

コシガヤホシクサ (*Eriocaulon heleocharioides* Satake) は曾つて埼玉縣の越ヶ谷を流れる元荒川の干上がつた泥土の上に群生していたものであつたが、その後流路の移動や洪水や殊に戦時中の河川敷の農園開拓に依つて全く姿を消してしまつた。昨年10月に確めに行つて元荒川畔を歩いたが、本種發見當時には氣付かなかつたコイヌガラシ、ホソバインタデ、サデクサなどの大群には出會つたが本種は遂に見出せなかつた。本種の花莖が本屬としては極めて太い水々しい多胞質であり、機械組織の幅がせまく放射状にのびたその組織と表皮系との接する處で廣くへこんでいることや腊すとの種類では堅く乾きしかも潰れないのに、本種では極めて扁平に潰れてしまうことなどはその著しい特徴であつた。この特殊な花莖と根莖の構造からみて關東のせまい、しかも平野中に突如として出現するなどは恐らく固有種ではなくて、寧ろどこからか導入されて邊かにひろがり、そして急に消滅した渡來種であらうと思われ、それには越ヶ谷につゞく元の宮内省の鴨獵場に關連がありはしないかと思うが今のところ何ともいえないし、又世界の他の地方のどこにあるかも手掛りはなかつた。近頃 Hare, C. R. The structure & development of *Eriocaulon septangulare* With. Journ. Linn. Soc. London 53: 422-448 (1950) を見てびっくりしたことはこの種類の花莖の構造がコシガヤホシクサと全く一致することであつた。差異は花莖の稜が6で8-9稜ではないこと、花部が2數より成ることであるのみである。この種は北米の中部以東と大西洋を距て、英國の一部と愛蘭の一部に産するもので、この分布は甚だ奇異であり、或は渡鳥に由來するか或は渡鳥について云われる大陸漂動説に依る歐洲大陸と北米大陸との離間前の分布であるかも知れぬが、近縁の *E. Parkeri* B. L. Robinson (北米東部の一部) と共にコシガヤホシクサとの近縁は明瞭である。ホシクサ屬は元來花部の2數か3數かを以て先づ二大別すること Koernicke, Ruhland の昔しから Moldenke, 中井博士、佐竹博士の今日に至る迄常石であるが、私は再考を要すると思う。日高のエゾイヌノヒゲ (*E. perplexum* Satake et Hara) の存在の如きは外觀は2數性のイトイヌノヒゲに酷似し唯々3數と2數の混在と花蓋片の毛の細胞の數を異にするのみで、雜種とすれば後者とニッポンイヌノヒゲとの間にできたものでこれは兩群が存外近いことを示すものであろうし、一つの種とすれば2數3數が容易に移り行くことを示すものとなる。コシガヤホシクサも恐らく同様に2數のものと花莖の構造の如き點で一致するならばその間に強い類縁を認める方がより自然體系であるだろう。澤山の節名の中には多分この群を示すものがありそうだがもしも見當らぬときは Sect. *Spathopeplus* subsect. *Macropoda* Satake を節に引上げて上記のコシガヤホシクサ、*E. septangulare* 及び *E. Parkeri* の3種及びその類似種を包含させ2亞屬は全然やめてしまつた方がよいと考える。